

プロフェッショナル

高橋真紀[†] (岩手県中央家畜保健衛生所病性鑑定課)

公務員獣医師を志望する獣医学生が極端に減少し、後継者の確保が難しくなっている。2008年から、現在の職場に学生を招いて仕事の内容を説明している。優秀な学生を探し、当県への就職を誘導したいと願っている。数人の学生から尋ねられた。「家畜保健衛生所の仕事に生き甲斐を感じられるか」、「人生の基本は本人の努力と考えている。当職場に勤務し、努力を重ね、僅かながらも結果を得て、ここに就職して良かったと感じている。生き甲斐や喜びを自分の努力で探し、実感して欲しい。家畜保健衛生所はあなたを待っている。」と答えた。

家畜衛生業務に従事した16年間をふり振り返りながら、日頃から大切に、心がけている事柄を整理した。

1 経 験

新米の頃、豚の疾病をいくつか経験し、農場主から多くのことを学んだ。現業務を進めるための基礎になっている2つの出来事を紹介したい。

1990年代、伝染性胃腸炎及び豚流行性下痢が国内各地で流行した。県内でも発生し、診断成績とその後の防疫対応の説明に農場を訪問した。1996年3月、社会人2年目の経験だ。案内された分娩豚舎は既に空で、消毒も終了していた。壁や床に塗られた石灰乳の白さが眩しかった。農場主は過去の経験から原因を察知し、対応策を即時に実行していた。

1998年、他農場で豚サーコウイルス2型が関与した離乳豚の死産数が増加し、対策を農場主と協議した。今では有効なワクチンが市販されているが、当時の対策は「一般的な飼養管理の改善」に限られ、飼育密度の低下、換気の励行、保温、消毒などを提案した。当方の説明に終始耳を傾けていた農場主から、最後に、「具体的に、どうすれば死産数が低減するのか」と問われた。求められていたのは病気の背景や理論ではなかった。飼育密度を下げるため、その農場で実行できる具体的な手法を示していないことに気づかされた。

いずれの農場主も、何十年にもわたり養豚業を生業とし、豊富な経験、技術、知識を有していた。新米獣医師が俄か勉強で得た知識を提案しても役立つはずもない。病気について多方面から詳細に学ぶ必要性を痛感した。問題の本質を見極め、有用な対策手法を農家ごとに提示

できるプロフェッショナルとしての力量を養わなければと思った。

2 記 録

1999年から病理学的診断業務を担当した。「病気の種類や病態は無限であるが、一人が経験する範囲は限られる。経験した症例を活字に残し、後の世代に伝えることも、診断屋の責務だ。」と教えられた。経験のない症例に遭遇する度、自身の乏しい知識に肩を落としながらも、診断成績を論文にまとめるよう努めてきた。

病理学の専門家を志して10年の節目に、日本獣医病理学専門家協会(JCVP)の会員資格を取得できた。この資格試験では、診断から論文作成に至る過程で得た体系的な知識が役に立った。資格は5年後に見直される。今後も努力を重ねたい。

3 チームワーク

家畜保健衛生所では、多数の家畜に被害がおよぶ伝染病、栄養性疾患、中毒などを診断する機会が多い。疾病発生により農場が被る損害を最小限に留めるために、正確で迅速な診断とその後の防疫作業が求められる。

病性鑑定課を構成する4部門(ウイルス、細菌、生化学、病理)は、発生状況や臨床症状などの限られた情報の中で、あらゆる可能性を想定して病因を追求する。1例を挙げると、神経症状を示した子牛の病性鑑定では、脳炎を引き起こすウイルスや細菌の分離、鉛やチアミン濃度の測定、全身諸臓器の病変検索を同時に行う。各部門の成績から総合的に診断した後、農場に予防策を提案して病気の続発予防や清浄化を進める。これらの作業を

高橋真紀

— 略 歴 —

1994年 岩手大学卒
同 年 水沢家畜保健衛生所勤務
2001年 盛岡家畜保健衛生所勤務
2003年 岩手県中央家畜保健衛生所勤務
現在に至る



[†] 連絡責任者：高橋真紀 (岩手県中央家畜保健衛生所)

数日間で行うには、診断や指導に関わる担当者の連携が重要な要素となる。幸いに、他者の意見に耳を傾け、互いの業務の困難性を理解し、互いに支援する気風がある。恵まれた環境に感謝している。

4 初 心

国内で口蹄疫、鳥インフルエンザ、牛海綿状脳症などの重要疾病が発生する度、家畜衛生や安全な畜産物生産に関わる一員としての責任を自覚する。「病気を予防し

て家畜飼養農家に役立ちたい」。就職試験を受けた時の初心を思い起こす。改めて気持ちを引き締め、目の前の課題解決に全力を尽くしたい。

新聞に掲載されていた言葉が心に残っている。75歳で二度目のエベレスト登頂を達成したプロスキーヤー三浦雄一郎氏の言葉だ。「老いることは怖くない。ただ、目標を失うことが怖い。」常に目標を掲げ、歩み続ける姿勢を見習いたい。